

『日銀の眼でみる 高知けいざい』

日銀高知支店長 大谷聡

県経済の地域特性を探る ①

中部と東部は密接に連動

西部は公共投資・観光頼み

今回は2回連続で高知経済の特性を地域別に掘り下げてみたい。きょうの「上」は、地域ごとの経済構造と結び付きを踏まえ、県内各地域の経済がどのように相互に関係しているか、いないかを見てみよう。

東西に長い高知県を3地域に分けると、それぞれに異なる特性が見えてくる。3地域とは、香南市や香美市より東の「東部」、高岡郡四万十町より西の「西部」、高知市を中心とする「中部」である。

■中部が伸びれば東部も

県全体に占める3地域の経済規模は、東部と西部がいずれも1割強で、中部は7割強に上る。典型的な「中部の一極集中」だ。

では、3地域の経済構造はどんな特性があるだろうか。

【中部】人口集中が進んでいるため、多くの人を相手にするようなサービス業の比率が高い。例えば小売や医療などだ。製造業の比率も比較的高く、高知県の製造品出荷額の75%を占める。農林水産業の比率は低い。

【東部】農林水産業の比率が高いうえ、香南市を中心に、製造業も多い。

中部と東部は経済的な結び付きも強いいため▽中部で消費が増えると、東部から中部への一次産品の出荷が増加する▽中部から県外へ製造品の出荷が増加すれば、東部から中部への部品などの供給が増加する—といった傾向が顕著だ。

■結び付き弱い西部

これに対し、西部はどうか。

【西部】東部に比べて農林水産業の比率は高くない。建設業や観光関連の宿泊業・飲食業の比率が高い。

西部は、中部との結び付きも弱い。そのため、景況感に大きな影響を与えるのは、域内の公共投資や観光客の増減だ。

3地域についてまとめると、こうなる。

高知県では、「中部」の景気が良くなれば、時間をおいて「東部」の景気が良くなる。ところが、中部との結び付きが弱い「西部」の景気はすぐには良くならない。西部が上向くには、公共事業や観光客の増加が必要—。

ここでグラフを見て欲しい。日銀高知支店による企業短期経済観測調査（短観）の結果を折れ線にした。

#### ■短観に表れた地域特性

左段の折れ線は「業況判断DI」。業況が「良い」と答えた企業の割合から「悪い」と答えた企業の割合を差し引いた値で、プラスは「業況が良い」と答えた企業が多いことを示す。

中部は2013年度にプラスとなり、その後、15年度にかけてプラス幅が拡大したことが分かる。東部はやや遅れたものの、1年後の14年度にプラスに転化し、その後もプラスを維持している。中部の「業況が良い」が時間差で東部にも波及していることは、双方の折れ線が似た形になっていることから読み取れる。

これに対し、西部は中部の動きに連動せず、15年度までマイナス幅が拡大した。プラスは16年度に入ってからで、公共投資が増加してからだ。

#### ■人手不足感も地域差明確

こうした傾向は雇用でも見られる。今度は赤色の折れ線「雇用人員判断DI」に注目してほしい。人員が「過剰」と答えた企業の割合から「不足」と答えた企業の割合を差し引いた値で、プラスは「人員余剰」、マイナスは「人員不足」と答えた企業が多いことを示している。

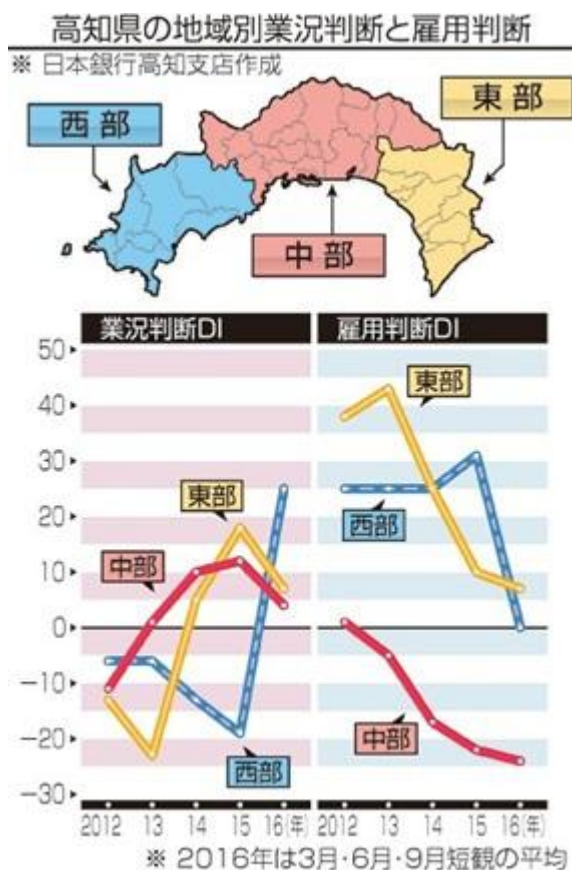
中部は、景気回復に伴って13年度にマイナスとなり、その後もマイナス幅が拡大。年を追うごとに人手不足感が強まった。これに連れ添うように、東部は13年度をピークにプラス幅が小さくなり、人員の余剰感は年々縮小している。

では、西部は？

15年度まで大幅なプラスで人員余剰感がかなり強かった。ところが、公共投資が増加した16年度は一気にゼロへ低下。「人が余っている」状態から急速に「足りない」へ変化している。

こうした短観の指標からも「中部の景気回復が波及し、東部でも景気が緩やかに回復するが、西部への波及は見られない」という地域特性が確認できると思う。

問題はそれらの特性をどう踏まえるか、にある。次回はその点を掘り下げたい。



＝随時掲載